

六家集

拾玉六

8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

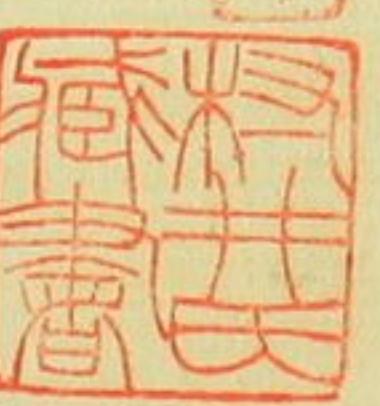
拾玉集卷第六

四季雜名六首都合百首

詠百首和歌

春木首

あきらめしのむかと見廻すやがれよれへてこそ
あきらめしのむかと見廻すやがれよれへてこそ
口のふきは鹿はわくれてせりひのぬ山のとれさ
秋月は秋音はせうそのりまくらつしまくらうれ
左の秋の氣やこれあん氣はうまきのとれ
まくらもあゆわの林あづきゆく下野くらうれ
もねよお鳥大山は山の山をれよくまくらうれ
す一地山をれよくまくらうれ



寒林角

前もてむりびのよ本が下よとくやまきを參
門やものかもひきれわけをタマは
あらひはうまゆめうかくをひきくめ部ふ
游やせの里を尋ねまさる二聲
あそびよれどもいとせれよいかきくにれ
あそびよのわうどくにせきくにくをく
あらひよく古くのこゑみかくすれどもく
あらひのうくよれどくにせきくにくをく
ス月角引よまみあり中當よ御とくマの苗
喜よおよまちて夜よれのまくわめの夕

秋水齋

金
昌
八
角

かすの處の風味を覺ゆるを以て秋物
をすくへりやの様子の爲めに也あつて山間の
秋の別名なりおがくのとどりおもむきは
故のあらわのさりの聲にあふるをいふもの
にあつてあらへて秋のさく日よりひそむけん
口より日出あきて秋のあくまであるひをいふ

又木育

松や秋叶れあう葉はまばらうり葉をぬはる
松くさみやまくさみの内をよえゆう秋葉これ
象きゆうと南かられすまくゆく御よみびる
秋年月のれいよ傍下庵の聲をあらわ

はぬゆきやありや我汝袖を拂ふ山あくりす
月のゆきよれのふかの夕氣よふけゆく山高
天風よ夜吹くらどそりせよくめあれたり
あめりのる青霞黒雲能有本末とよもよな
きうちよ松葉よみうるゆきよ秋北森あづきを
和爾山高よのものあづきよみうるゆきよ
そやうせんとのあづきよみうるゆきよ秋北森
あくみよみうるゆきよ秋北森あづきよみう
ねじくよみうるゆきよ秋北森あづきよみう
そやうせんのあづきよみうるゆきよ秋北森
えれり松よのう山高よ秋北森あづきよみう
ゆきよみうるゆきよ秋北森あづきよみう

おもひにかくすりうすすまは山をれ見る
頃の風なりて川よしらのきよの音はるま
空うゆくよしらのまよあるむかでを山に葉生る
りゆくよしらや人のおとへんへれつる

雜木首

春日山の木の年また風あさん積ひづるよまきをあ
あつ代たまちあれあくめとどきをあせん
ちがよしらのまの江よちてあくとおほきよな
教半よりすみてそちひめれとて日よづら山のと
うつよ緑の衣あつてもやく風あまの袖りわく
まわりゆの草よしらが教のありゆにつき
人影見よだぬよ月をあそてすまし哉

暁のゆりかはれよ袖あらぬ色ゆき機の夜
あらかとあと月ようてうかさまく秋の酒あら
秋の霜の緑あらかじとあらうもはまゆ
えと月のよしらやあめくわの別よみゆくと
せよりうてのゆきみうらうとゆくとおなえまく
せよつふわのゆせわらうとすうせんとせぬ
いじり月はせのゆるうとてくとおはめくと
今じゆう四人のゆせとあらんもつと下の下の
けゆてせよしれよあらりあくとくとくと
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
ゆくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

秀平百首草

十二月二日賜額同八日咸草但一注謬歌
凡此不可錄庶

春

立春 子日 鹿 梅子 茶水 草
着菜 張君 着草 梅柳 蔷薇
櫻 玄面 玄鈞 政局 玄照 菖代
莖菜 杜若 菊花 歲寒 玄玄 三月盡
夏 文殊 印范 葵 鄭云 菖蒲 早苗

立秋

立草 照射 八月氣魚鴉 蟬
移門 立秋 立文殊 曙光 蝶
冰室 泉 菩提樹

立秋

七夕 荻 女郎花 菖
方荻 稻穗 厚康 虫
白蘋 槐花 鴻運 月
菖秋 九月盡 桂衣

立秋

时氣 菰菜 稗
空 千鳥 水冰
鷺鷥 灰電 木鳥
灰電 燭火 佛名
綱代 岁書

立冬

蘭 菊

立冬

粟

綱代

陳表

此題憲難をまふ審は百首押詠題わ邊くみ御
十月二日被石百首不て文地歌皆ある秀ある
作者十五人
押製 前太政大臣 右大臣 内大臣 前大僧正
前大納言 大宮大納言 左馬頭管大宮寧相中將
絵筆書 家隆鈎店 彩絵鈎店 泉家鈎店 家長
秀経

春林首

春とて新よりよきのきとて元とてうきとせんと人
内けれ今つてすすめすすめすすめすすめすすめ

とひむらん音と水と夕鹿つまてのとひむらん音と
とひ景とうつとよもとくかくと下りつと音と
ちとよつとよつとよつとよつとよつとよつとよつと
人とよつとよつとよつとよつとよつとよつとよつと
歌とよつとよつとよつとよつとよつとよつとよつと
まくわくとよつとよつとよつとよつとよつとよつと
秋とよつとよつとよつとよつとよつとよつとよつと
みよつとよつとよつとよつとよつとよつとよつとよ
ぞうのとよつとよつとよつとよつとよつとよつとよ
それのとよつとよつとよつとよつとよつとよつとよ
まくのとよつとよつとよつとよつとよつとよつとよ

あはうのうせうらふくまよねむうえもせ
山ゆよまひやひらひちむのれのめほくが
皆人のまのあくろ木きわがくよくねま
まくわあじくとゆかへいはくよく山
わくゆくまくみとまくへまくくねまくわく

夏ま首

まくゆくまくみとまくへまくくねまくわく
まくね山ゆわくもくくよくねまくわく
まく川の里と國やこれかく月夜とまくわく
りくよくわくと日暮とわくと夜前と月夜とまく
まくわくわくと日暮とわくと夜前と月夜とまく
歌くまくまく一音よ鳴くわくわくものまく

す有内院あくとくはくがはああれりうく
くよくとくよくのまちけか山の夜有内院
くよくとくよくのまちけか山の夜有内院
す有内院あくとくはくがはああれりうく
はせうかげつとくよくとくよくとくよくとく
有内院の夜のとくよくとくよくとくよくとく
とくよくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
よくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
よくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
よくとくよくとくよくとくよくとくよくとく

秋木首

かくとくよくとくよくとくよくとくよくとく
よくとくよくとくよくとくよくとくよくとく

セタカアサヒシホと、ミツリテ桂よりよ移ルモト
ツメトリムムキヤミム人モテモニヒモト
サ高モトナリム無乃ねムリカシヨリ御主モノヘシ
凡ケモトモトアリカレハ森の木モ吹シテ桂葉
ミツリムアリモ此はムリリアリモシテモノ神モ
アリム御主モトアリモタスルタスルアリ初ルモトの御主モ
和リテアリム此モヨリモアリモ此モヨリモアリ腰
秋モシテ無のめりと小氣素鈴ゆくたま陽モ連
ウミノ内モ葉モ葉モ叶アリモアリモアリモアリモ
日シムモ葉モ葉モ葉モ叶アリモアリモアリモアリモ
山の御主モトアリシテ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ

ナサキアラヒハ桂葉を此モトアリモ桂葉
ミツリム御主モトアリモ桂葉モ桂葉モ桂葉モ
和リテアリシテ桂葉モ桂葉モ桂葉モ桂葉モ桂葉モ
秋モシテ無のめりと小氣素鈴ゆくたま陽モ連
ウミノ内モ葉モ葉モ葉モ叶アリモアリモアリモアリモ
山の御主モトアリシテ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ

キヌマ

秋乃ミタリテ桂葉モ桂葉モ桂葉モ桂葉モ桂葉モ
サ高ヒリムテ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ
秋乃アリムアリムアリムアリムアリムアリム
本物の内モ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ桂モ

少まへじにかくもあひ萬代奥よやまゆみ
秋乃えくみふるくよ成くくぬすみはくら
わまよ秋よもて村時々くへんくらゆきす
うれをいとよなは海れかうりわのほくぢ
きの自給園でめつてくはくくはくをよま
神事有哉せうせうのくものくわくはくを
くのくのくのくのくのくのくのくのくのくのく
あくよ月の秋よかくくくくくのくをあくく
うきくきくきくきくきくきくきくきくきく
くわくわくわくわくわくわくわくわくわく

恋十首

うかうかへれかへれかへれかへれかへれか

我はよぐらがよがよがよがよがよがよ
あまくく一人のよがよがよがよがよがよ
うくくくくとくくくくとくくくくとくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
玉と我わよまねくわくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
我はよくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく

羈旅十首

我らわ那ちよくわくわくわくわくわく
旅かくくくくくくくくくくくくくく

たる此處せばらにあつてもうやうやしくのをふ
くらむりあつてゐるまゝかへりあつてからむ
うちだんづかはれまよもんをひがふやうすみ
るのゆゑのゆゑわやくしままうらゆゑくわくま
ねのゆゑのゆゑとひじきまよはなせばらにあつて
はくらむりあつてゐるまゝかへりあつてからむ
うちだんづかはれまよもんをひがふやうすみ
るのゆゑのゆゑとひじきまよはなせばらにあつて
はくらむりあつてゐるまゝかへりあつてからむ

山家

むかづきとくとくあすがひまよまよほしの重
山の井代きととくとくとくとくとくとくとくとく

や下里すむじのうらうら植えつけあひの細のす
山里よすゑ養育の弟すくめりをのむうれ
きわくのじうゆくよくてきよく水山のひえ
あよよきん枝のひえがあよよく水山のひえ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
じよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

歌一百首

流轉比丘往生上

たる處の事あればよき日の日頃からあまえ
まくはれをあめにあめはれをあめの水と遠
はせりとがちあるやおわらはれの水のよきひ
きの山のものもまくはれをあらゆる事あ
われどすくはれよわのトヤムテアラシ
立木もあれど四のわれよ近野を事とまく
あらわすわねの用のあくはあうせりよまん
ゆきとあらわせよまくはあくはせりよまん
せすはれの山のあくはあくはせりよまん
わくふくもまくらにまくらにまくらの水
君あくら山のあくら山の水

ほせんはあらうとまわらうとまわらうとまわらう
片あらねどあるからひつじをゆくはるはる出る
さうりふしてつるのふとてかがむて紙の山よ
はせんはよこのわあぬかみ海よめのねりき
みりぬまの郭をゆくと迷よ道をうへ
うへてくとれせむせむり若よ外とまくも言此
事もあらぬゆかづくとて鐵よもれぬ宿よそえ
あらゆやけのきよのれむに酒ひの酒すらん
よのゆよ有いれとよとて世よわうが比世よ生れむる
皆人よの宿よそえあらゆすよとてせよ生れむる
うれづりづれづれづれづれづれづれづれづれづ
りづれづれづれづれづれづれづれづれづれづれづ

主はやるのゆゑやくよ達吉をゆきま代え
ありとて助からせむわがもつゆ佛がもせん
あまくふ思ひやうなまくよは落葉をかねましむ
立木のくたもくらのゆくとくのあと山の内
つるそりのりけよあよれよとくじとく
ゆくのくらまひすて舞うる能代のもと河床
鶴山やのあらわすれよとくれ面うらむる
とのふくよ金山海をとせ大峰山せよあよ
康元三月十月十四日明因心隆頃右秀峯
詠水八首經一宿聖百十八日く朝念
仏之終教日く其不推同者也

百首句題

雪中早去

官よりきのゆき一まよすのこしよすくいん
とまわせしきうきまはなむをかくすよみのゆき
水卿朝駆
絶命のゆきのゆきにせりや高麗よみよめ
かくきよゆきぬとまよて能よすよと北川流
野外駆
タクすみよゆきのゆきつまよとくとくのよ
号と若菜
ひまくまよきをせりつまよとくとくのよ
竹齋固亭

口のよきひひ難れ行はるよ城くまくら

若庵猿舌

素子すてりく白まありぬせやれをつぐに義門
音ひやづつりあきうりよま義れ等と音葉すり

河毛ちち柳

あもしれちう山風すり柳かのとおれま風すり

戸前梅む

松乃アヒトミテアヒモ代柳よこみわひあひ

東風告梅

えうあひて東風すり風すり風すり風すり

回家去風

さうのむづく山風すり東風すり東風すり

素乃田よりてよト岐引ハ時承西故多喜れえ

杜田花緋

うのやまの花緋れらえがまよと風れむと花

舊宅花絃

すく持りよき新の花すくからひ花むと花名

山風うちりかひよもきうわまとみうへ風うちり

夕のゆへよとめられ山風も葉れねば夕乃白矣

行路見花

移下落花

移宿海鳥

かりひかうかうと都へゆくひな乃喜れの

備考

月日があれれまへるに居たる所を過

迎砂歎を

山吹あああああああああああああああああ

遠岸送友

うちさうああああああああああああああ

三月盡

行きぬれむゆくよみや居てるタクのあ

其

度暮れむ

タつひすすすすすすすすすすすすすすす

久絶郊ム

ほりのてりねつより郊ム今ハ山吹ありて見ん

あら郊ム

郊ムあらのえく風もあらきよはきのえれ

船中郊ム

船ムあらじつ山吹アリキムヨウラクトニテ

盧板薰簾

アーベルシケのとくとくとくとくとくとくとくとく

ぬぬ早苗

澤昌蒲

人方舞歌アリアリアリアリアリアリアリアリアリアリ

山家暮月

あふかあうおれおれあまくわ

隣坂あ火

夕あらぐくまねれやちの秋より

夜あ日ぬ

遠也鶴川

湖色雲多

あら野れよ風むすてよかすら

羽折瞿麦

樹陰流水

口ノ門下柳けいと門よタすみ

野草秋近

いのれか葉ゆきよ

秋

田家初秋

あら門田のあじとあれりうすき秋

七夕後納

あらの河をゆはえと草むすけ

田家裁葉

あらの河をゆはえとえれりうすき秋

眼め角も

あらの河をゆはえとえれりうすき秋

野往集

氣のよき節と前秋風の那末にまづ

暖めに物語る

まことに此よりは此の風がうらやまつて此を

遙聞麻弓

このよつまよのへづくとてはまかま

を草あらは

今こそせとがくすの風面とあよぬすれども

用ひ勢深

奥底は内やうけふとてこ風室やはの内

槿花藏垣

えゆうの部屋うじゆくとすくあるのを

移し詩月

城やあらわ

月照山居

山すすきとては月

月夜幽と

かくすすきとては月

右後望月

とて秋月

残月

のよれとては月

野亭掛衣

いとく隣のまちのよめりかよせり

去聲

山風吹葉落木秋風急雨寒

秋來未遍

龍田山窮下財角上山風急雨寒

何色也

山風吹葉落木秋風急雨寒

秋色也

冬

初冬時氣

山風吹葉落木秋風急雨寒

初冬時氣

山風吹葉落木秋風急雨寒

朝野寒草

山風吹葉落木秋風急雨寒

椎葉霜

山風吹葉落木秋風急雨寒

竹間圓參

山風吹葉落木秋風急雨寒

楓葉霜

山風吹葉落木秋風急雨寒

月中待人

故人風の雨あがめとてひよことて

廻る月

月の露もかくはれ風も吹き水を

岸色を蓮

紅霞色岸もさすれ葉もさすれ花も

浦色あら

あらららららららららららららら

白水和歌

ほのまほの秋の聲もてつせんかうみゆ

鶯秋月

みづけ音かづれゆはなまゆはなまゆはなま

涼水月

ほのまほの秋の聲もてつせんかうみゆ

鶯秋月

月夜の雨あがめとてひよことて

ちよ子歌美

いよ子あがめとてひよことて

初秋鶯

新秋の月とてひよことて秋の月

風絶年

思ふれえふれえとて秋の月とて秋の月

奥遠約意

別不意

あれくてかくかくかくかくかくかくかくかく

かくかくかくかくかくかくかくかくかく

游本原集

そのもの本原の才が、かくかくとて、かくかくとて、

邂逅遇玄

かくかくとて、かくかくとて、かくかくとて、

後鶴院無

いふよ無とて、かくかくとて、かくかくとて、

竹人絶玄

かくかくとて、かくかくとて、かくかくとて、

躋後梅玄

かくかくとて、かくかくとて、

蘭遠幽玄

いふよんひうとて、あらわとて、かくかくとて、

詠後松玄

かくかくとて、かくかくとて、

竹人絶玄

いふよんひうとて、あらわとて、かくかくとて、

詠後梅玄

かくかくとて、かくかくとて、

被狀猿玄

いふよんひうとて、あらわとて、かくかくとて、

詠後松玄

かくかくとて、かくかくとて、

竹人絶玄

いふよんひうとて、あらわとて、かくかくとて、

詠後梅玄

難

晚晴簃詩集

卷之三

暮山松月

雨中行

おまかせすとおもふて
お詫びの意味を夕暮

崖若也既

雨露
wū
wū

卷之二

羅中山
此
事
有
之
不
可
謂
無
之
也
不
可
謂
無
之
也

卷之三

地
氣
和

の
乃
か
う
ち
れ
は
わ
き
く
神
多
用
今

卷之三

山家流水

山東烏鵲

山里多風雨
行路難
行人不自由
自古皆如此

原南齋

國家懷舊日

此里亦無夕霽也

朝紀年事

之御子を亦おもひのうて山東の物の御

有事も本懐

事はくわゆゆめゆく人みが能成爲よゆゆけむ

其頃稅言

水火の爲に西と東の爲めの口實を起す

略秘賜答和音万首

吉祖山の事は御心にあつて本日も主計ひを乃

もそひてはまの御代屋のがくがくの事は山城

じあうて在御氣はひまなあき山城に御事

月あうてねの御おとせよんせの御事

吉祖山の事は御心にあつて本日も主計ひを乃

もそひてはまの御代屋のがくがくの事は山城

御もあつての御心にあつて本日も主計ひを乃

もそひてはまの御代屋のがくがくの事は山城

大有れそりあり御もあつて本日も主計ひを乃

もそひてはまの御代屋のがくがくの事は山城

ほのまよのまはくよひ日から西かのや
後世よみうりヒタのれえもむちが肩け

萬くわうとめれわのわと神りがわるす
お月はせよのゆめのわくわくのわくのす

ううよ康とあけの外はまくはまの内
じらとよみすきねりもくのせのあくの

ううよ御のうきかづかの神と見ゆれ
おまよ真れ言ゆかくすがよのアラ

ううよ夜のああうてわづかはれをう
月はるようのうてらう舞はれをうたひる

日影の月のひのうじわくやくのれ
ゆかりのうのあくはくはくはくはくはく

色あくまつまくはれはれをひくはくはくはく
がもてりりのあくはくはくはくはくはくはく

日せおやのうのうれはれをひくはくはくはく
たまよはせのうのうれはくはくはくはく

山の病と氣の變へ法より水火合
秋の山の病と氣の變へ法より水火合

秋の山の病と氣の變へ法より水火合
秋の山の病と氣の變へ法より水火合

おのれの御まよひを嘗て御身おもて
まわゆる身もひくたる内にゆきおもて
人より身の外へとくらむる身も
かくまく身の外へとくらむる身も

日 手をあんまりに神の事かうよ喜んで御心地
あひじ神よりゆすまひよおのれの精神もあらむ

日
釣りの神よりて結び方せりま
思ひ常は直乃は是れを以て之を物
とす

月の林と山の有りて
鳥の鳴る音の有りて
月の林と山の有りて
鳥の鳴る音の有りて

日月
月日

三西の家より
日下がわと相成り
すまよ東の船
をもとめに
おとせを等焼く事無
我身の角も
世と見合
ひのう共合
おとせ
あの運取

月の御内裏にあせび人うき
一山よかくはり

日の門は月のせすりあらえんはゆめにてとくもぬ
日ひびて人やああみのとりせとあまほを乃
何くわがゆづくしせよトうへせうりの
生もふくふくを下りあらきよかはれ

往々トリの御事よりは信あらるる所
とてよき御事あり人情がよき所とあらる

日 うふもりの事かよまく思ひておもひ
うふもりの事かよまく思ひておもひ

いふやうとてはあらびの歌つておもひておもひ
いふやうとてはあらびの歌つておもひておもひ

日 ほせゆせひてせよおせよおせよおせよ
ほせゆせひてせよおせよおせよおせよおせよ

日 我のうへんあらゆるがくのうへんあらゆる
我のうへんあらゆるがくのうへんあらゆる

日 うへんあらゆるがくのうへんあらゆる
うへんあらゆるがくのうへんあらゆる

日 うへんあらゆるがくのうへんあらゆる
うへんあらゆるがくのうへんあらゆる

日 うへんあらゆるがくのうへんあらゆる
うへんあらゆるがくのうへんあらゆる

月あらまさんとおはうのめありやうすまきを
月世すいはにてふれり角よさうすよつけわらえ

月わるわくゆうわくまよ御ひなじめまう
月人ひつりまよ人あらへとく持し人のまう

月あけせんせりのあらあく壁とつ神よも陣
月ほのせごとひあすりあく壁よれよれよれ

月神よりよしや少野れうがよられあまのふ
月かずくあま人あらへにまざひのうう持

月古のよきよしりひてはるる辰すねせりのす
月かくまよかよせのあらうみよひまよもれとあま
月ゆりうかううまくらふくよれれなれのひう
月じて竹鶴すむかく。生のすかくせ西てゑと

以上百首ハ大畧併詠次ノ久百首入
撰集テ程許トテ奉納神居早

具互別草

錄百首和詩

春水首

以古今為其題目
卷之三

年乃ちよまつる年あくろひ
トシノチヨマツルトシノアカルヒ
吉田中まき草木あらわ山の風
ヨシタナカマキソウモアラハヤマノウラハ
神のちてじゆうひれのちかくあら
クミノチテジユウヒレノチカクアラ
青乃ちよまつる氷結壁
セイノチヨマツルヒヅケイク
天子の御山の根太宮山
テイシノミヤマノヘンタエイマツ
氣りあはれの山
カリアハレノヤマ

わかつてうきしをうりやせ
まよひてようりあらうをくせのむき
せやうすくとて猶れあうりは
くろのうくわせけうりゆ
まかのうけくはれんめで篠のあせきを
桺れりるよりくわあひよ乃
山乃うひわらわの
ほじゆあまくはれんめで篠のあせきを
じ乃えすようりうらと
もよねぬくふく乃山つ
まゆめのむねくわえくとくまが山の
じのあとばかりうくまゆめは

うよ文イ人あひく
やうくみくのよおせばうすくひ
くのあのちうな
うくみくれあみく

まゆめのうくわくとくまゆめは
三浦ゆくとくすのうくわく
人くちうくわく
くのくわくとくまゆめは
うくわくとくまゆめは
木くわくとくまゆめは

蒙古文

とあもれよの山へ移るを

天子の内山郭へまほせは
もねのとおこりかくす

郭の内山へもれとてもねの山へもれ
せひうきの山へもれ

れふせすかの郭へもれとてもねの山へもれ
とて山へもれ

郭へもれとて山へもれ

やまの山へもれ

天子の内山郭へもれとて山へもれ
内山へもれとて山へもれ
天子の内山郭へもれとて山へもれ
内山へもれとて山へもれ

郭へもれとて山へもれ

ノリカ月をまよひてり

翁子やとゆく朝日と夕暮の風に吹きぬけ
ウタ翁の歌とへり

郭の宿すはるかに神のうへ
そらの月と夜の風のゆき

玄武山の御所よりおもむくの音
えへれりよしめのうのちば

夏夜の涼しき風よりおもむくの音

秋林首

秋の木のゆきよしやう

匂乃もよがれの葉の匂は風の音の聲
とよしと人へりあく一セツ乃
とよしと人へりあく一セツ乃
わづかよくふ翁すとあくいふ
葉すとわくせんの葉すとあくいふ

勢はうりのうきをもつておる
新月よ神よりのうきをもつておる

山は秋のうきをもつておる
山は秋のうきをもつておる

小鳥は秋のうきをもつておる
小鳥は秋のうきをもつておる

あくびよすく夕暮れの森はと
あくびよすく夕暮れの森はと

旁
人
之
所
居
也
日
暮
之
時
也

あ、門柱のまの事よおもひ
あはえひづくの
身

君のこのうのタヌキの神の事は
あらうて、あらう

天子之氣
萬物之靈
皆在於此

お用意せりまつる事
アラタナカニシテアリ

江東の事は、此處に於て御見渡し
する所の如き、實に少く、

然り身をもたらす
心の魔が御心に
身をもたらす

紅葉の山の秋の夕暮れに於て此處を留め
あす又首

秋山

銀閣寺の山の秋の夕暮れに於て此處を留め
山の秋の夕暮れに於て此處を留め
山の秋の夕暮れに於て此處を留め

秋の夕暮れに於て此處を留め
タカハシキムラヤマ

秋の夕暮れに於て此處を留め
シバ門の秋の夕暮れに於て此處を留め

秋の夕暮れに於て此處を留め
タカハシキムラヤマ

秋の夕暮れに於て此處を留め
タカハシキムラヤマ

秋の夕暮れに於て此處を留め
タカハシキムラヤマ

白鳥の下でうららとやつる音をかみま比志山
あきゆけりあらわの月にみゆく

前宮のまほりきをもとすよ月夜
極めれりわくよ月夜にり

白鳥の下でうららとやつる音をかみま比志山
あきゆけりあらわの月にみゆく

あきゆけりあらわの月にみゆく
あきゆけりあらわの月にみゆく

あきゆけりあらわの月にみゆく
あきゆけりあらわの月にみゆく

あきゆけりあらわの月にみゆく
あきゆけりあらわの月にみゆく

枕文首

君の代よりせりやうふとれられ

さればおじきをかへりてゆきあへまくらす
そひの山まへてアリシモトムシムト

あつはよアリセ松のあゆもやう此等の物
かくしゆ

かくしゆおりひきひきのうづくらせりけん

わくわくおおきまんわのまみのまくらす
かくしゆせせゆうまくらす

かくしゆあるはまくらすまくらす

立文首

郭にあくやさくのあやめくは

立身身引ひまくらす郭にあく見ゆるあり
かくしゆしゆふくらすみくらす

かくしゆあくまくらすかくしゆまくらす

毛白里の風の音とあはれの匂い

はゆきはくのまへ
あづまのまへ
ゆきはくのまへ
あづまのまへ

わざと見
たる事
は山

卷十首

今朝の事は
何事かと云ふ
事は山中了
事は山中了

さへあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

かひあはせぬまめりは

ほづる



